

中島廣足の歌風：『自文政五年至同七年詠草』について

白石, 良夫
純真女子短期大学講師

<https://doi.org/10.15017/12106>

出版情報：語文研究. 43, pp.22-31, 1977-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

中島廣足の歌風

—「自 文政五年
至 同 七年 詠草」について—

白 石 良 夫

る。表紙には、左肩に薄手の題簽が貼ってあり、

詠 草 文政五年 自六月
至十二月
同六年同七年初春

と墨書されている。又、右方に打付書きで、

從文政五年六月
經六年至七年初春

と記されている。題簽の文字は本文と同筆、即ち広足自筆と認められる。一丁オモテには、

文政五年自六月
詠 草 五 春 臣

と記されている。△詠草 五Vの△五Vという文字は恐らく五冊目の詠草という意味であろうが、この前後の詠草は現在諏訪文庫には残っていない。なお、印記は、△明治三十二年十月國幣小社諏訪神社 献本宮司中島広行V・△長崎諏方神社文庫Vの二種が捺されている。

「詠草」はその大半が短歌で占められている(約五八〇首)。長歌はわずかに三首で、そのうち△詠二浜小石歌一首并短哥Vと題する長

長崎県立図書館の諏訪神社旧蔵の図書(以下、諏訪文庫と稱す)の中には、同社に縁の深かった中島広足の自筆草稿・旧蔵書がかなり含まれている。その中に、文政五年から七年にかけて作られた歌・文章約六〇〇を書留めた草稿本がある。仮に「自文政五年至同七年詠草」(以下、「詠草」と略す)と名づけるこの一冊は、そのまとまった量と推敲の跡をそのまま残す生の草稿であることと、及び広足の初期の和歌資料ということから極めて貴重なものである。小稿では、紹介を兼ねながら、「詠草」中の歌風について考察を加えてゆきたい。「詠草」が新資料であるので、まず本文の掲載を行うのが順序であるが、今回それをするのは量的に無理が伴うため、今後の機会に待ちたいと思う。

二

まず、「詠草」の書誌を記す。茶色の表紙を付けた袋綴一冊の写本で、寸法は縦二三・六cm、横一七・五cm、墨付は四十六丁であ

歌・反歌の一組（二十丁ウラ）が「權園長歌集」（二冊、天保十年序）に載っている。又、文章が四箇で、△すゝか川の序▽（七丁ウラ）△八丁ウラ・△蓬萊石記▽（三十七丁ウラ）△三十八丁オモテ）はともに、「文詞」（長崎県立図書館所蔵。一冊。広足自筆。文政十二年本居大平添削）。「權園文集」第一集（天保十年序）に収められ、△近水楼記▽（三十八丁オモテ）同ウラ）は「後夢路日記」（文政六年。長崎行き紀行）にその原型があり、後、活版本「權園文集」（明治二十六年版）に収録されている。いずれも文辞が若干違っており、「詠草」はそれらの第一稿と見られるものである。他に、△懐をのふる詞▽（十六丁オモテ）同ウラ）がある。

更に、消息文が五通あり、それぞれ近藤光輔（二十丁ウラ）△二十一丁ウラ）・みす子（二十二丁ウラ）△二十二丁オモテ）・和田殿足（三十四丁オモテ）△三十五丁ウラ）・岡部春平（三十六丁オモテ）△三十七丁ウラ）・一柳千古（四十二丁ウラ）△四十三丁オモテ）に宛てたものである。光輔宛書信は、文政五年十一月十八日と同月二十九日の日付のある歌の間にある。これより先、広足は長崎へ始めて旅行をし、△いにし九日のひるつかたに山里にはかへりつゝいており、この消息はそのすぐ後に光輔に送ったものである。みす子は未詳であるが、文面が長崎でもてなしへの礼状であり、日付が△霜月十日あまり五日の日▽であるから、光輔宛の書信と同時に送ったものであろう。殿足宛書信は、文政六年五月十一日と同月十四日の日付のある歌の間にある。八代城に流謫されている殿足への手紙である。文中、

其高き御ころゝ。しらべをつねにしたり聞えさせ、かつはみづからの
ころをみがくたよりともし持りしぞ、こたひかくおもほえず松えの
城のもりべにまけられて、こゝにさらけうつろひ給ふなるは、月花のみ

やびのむしろの光うしなへるこゝちして、いとくちをしくこゝろうく
なんおもひなき侍り。

と深く歎き、殿足の歌に唱和した歌を含む十二首の歌を書き送っている。春平宛書信の日付は文政五年十月一日であり、光輔・みす子宛の書信と同様に、長崎で交遊した春平に、帰った後致した挨拶状である。尚々書きに「辻」の板字の質疑がある。千古宛書信は、日付が文政六年十二月二十一日である。この年の二月に広足は江戸行きを決行せんとしたが、途中、悪天候のために引き返さざるを得なかったの（「ふなじのなやみ」）、文中、

其御あたりの事うとくしく、せうそこも聞えさせず、心おこたりの
つみさり所なくなん。今は春臣が出たちもいとくかたこのみ成行は、
よろづよりもなげかはしきわざにこそ。

と、その無音を詫びている。

『詠草』の本文には、その約半分に日付が付いており、その日付を見ると、大体、日次の順に並んでいるようである。ただ、一丁ウラには、△深夜褙衣▽の題で二首、△はりまのたるみのうらにて▽の詞書で一首、△松間紅葉▽の題で一首、△春の歌▽の題で一首、無題一首、詞書中に六月中頃の日付のある歌が二首、計八首が書付けられており、表紙や一丁オモテの書付けと符合しない。これは恐らく、一丁ウラが元来白紙であったのであり、後にその白紙のところへ書き加えられたものと思われる。そのことは例えば、最後の歌が右下の余白に書込まれており、詞書の上に△印が付いて、左下の△印と接続していることから窺われる。又、末葉四十六丁オモテにも、△山家梅花▽の題で三首、無題（冬の歌）一首、△花のもとなおそ▽の詞書で一首、△雨後花▽の題で一首、△白川のいは

にてVの詞書で三首、計九首が書付けられており、一丁ウラと同様に、元来白紙であったと思われる。

二丁オモテから二十四丁ウラまでが文政五年の分。二十五丁オモテ一行目に八文政六年正月元旦Vとあり、四十二丁ウラまでが文政六年の分。四十三丁オモテに八文政七年ノ元旦試筆Vとあり、最後の四十五丁ウラまでが文政七年初春の分である。この間、広足は五度旅行をしている。まず、文政五年十月二日から十一月九日の初度長崎行きであり、『詠草』には次の旅行中の歌が書留められている(十九丁オモテ)。

神無月二日に高橋のかたにものして

霜さえし小田のをしねもおしなへてかりなきわたる神無月哉

紅葉深 和田亭宿題十月六日

秋の題也

露しもの色たに深きもみちはをさらにしけれの雨ぞぬける

神無月しけれひまある此比や四方のもみちのさかりなるらん

しけれふる遠の山へのもみちははちるをかきりにそめつくすらん

この旅行から帰ってきて、光輔・春平・みす子らに書信を致したことは前述した。次は、翌文政六年二月二十五日から三月九日の江戸行きであり(「ふなちのなやみ」)、途中で引き返したことはこれも前述した通りである。『詠草』では二十八丁ウラから二十九丁オモテにかけてにあたるが、旅行中の歌は『詠草』にはない。同年五月十五日は再度の長崎行きであり(七月二十四日まで。『後夢路日記』)、三十六丁オモテに、

○此間旅二行。紀行アリ。ナガサキ也。

とある。同年九月六日からみたたび長崎に旅行し(九月二十二日まで。『後夢路日記』)、三十九丁ウラに、

△九月六日より長崎にもす。此中紀行あり。廿日かへる。

とある。同年十一月十五日にも長崎へ旅立ち(十二月十四日まで。『浦のしるべ』)、四十一丁ウラに、

○十五日より長ききに行。十二月十四日かへる。此あひだ紀行あり。とある。

以上のように、『詠草』は文政五年から同七年初めにかけての伝記資料としても重要であるが、文政五年(広足三十一歳)という年が、広足のいわゆる八沈淪時代Vを経て家号を「樞園」と定めた心機一転の年であり(弥富破摩雄氏著「中島広足」)、『詠草』はかなり初期のまとまったものということができる。更に注目されるのは、訂正や傍書、行間への書入れの多さである。朱筆もあるが、殆どは墨筆であり、それは毎丁にあらわれ、控えぬものは、例えば、

さゝれ石のなりけんよをもきさらにへんいはほのなかに宿をもとめて

(三丁オモテ)

夕立の一そとぎせし露の上に月待やとるよはそすしき(四丁オモテ)

などと、テニヲハを直したのから、複雑なものになると、例えば、

夕立の雨ふりそとくみそき河風うちはふるたもとすししも(五丁オモテ)

いつれをかまつかたらはんふきふしものこちつもれる人にあかみは

そはあかなくあふるかな(十一丁ウラ)

遠かたの花は夢にも見えなくんなかきをたにめて、見ぬみは

みへわかれ行なる君かへるきをあやめのかつらかけておきさつひ

引わかれゆくなる君をいつこも(三十三丁ウラ)

などと、かなりの手直しをしたものまである。このように、『詠

「草」は繰返し推敲を重ねた跡をそのまま残している生の草稿本であり、広足の推敲過程を知る上で極めて面白い資料でもある。

三

「詠草」の考察の前に、広足の歌学の系統について触れておきたい。これについては、広足自身が、自著の『宇奈為乃須左備』（國會圖書館所蔵。写本一冊）の裏表紙見返し之余白に書き記している。長文ではあるが、自らの歌学を語った数少ない資料の一つであるので、以下に引用する。

よに哥のよしあしはかりしれる人まれなるはなし。おのれいとわか
りし時、近体家のをしへをながしの翁にうけて其伝へを承げしほど
は、哥はたゞ雲の上人のみしり給へるものとおひ、万葉集といへば
今の人のとくべからぬものとおもひ、其ものまなぶ人は聞もしらぬこ
とやうなることを哥にもよみて其論はたみだりに人をせしむわたくし
ごとのみおもへりき。かくて、集とも見もてゆくまに〈ひとりの
もひけるやう、人はとまれかくまれ、われはいにしへをひろくまなび
て其よしあしをいかでみづから見わきてしがなとおもひなりて、かの
翁にもいはず、ころもに万葉まなびせし人のあらはせる書とも見
しに、はじめて其論のたけたることをしりぬ。かくて、とし月にまな
びつるやういにしへをあきらめしりてなん。今は昔のおろかなり
しこともいたくはちおもはれ、かの翁がつたなきをしへをたふとし
こともいみじうくいおもはれり。

広足が若年の時受けたという△近体家のをしへ▽とは即ち二条家歌学を指すわけであるが、広足が従ったという△なにがしの翁▽が誰であったか、これだけでは不明である。しかし、熊本藩がその祖を細川幽齋とするところからすれば、その初期において二条家歌学に接するのは極く自然のことであろう。これに対して、△万葉まなび

せし人▽とは国学者歌人を指すわけであるが、諏訪文庫の本の中に、広足がそれらの人々の著書を書写したり、「万葉集」を校合したりした跡の窺えるものが多くある。その最も早いものは文化十一年であり、例えば、『万葉集』巻十六（文化二年刊本、山本三善稿写本）の奥書に、

文化十一年三月十四日以右校本（真幸校本）筆者辻校之畢 中島春臣

「雑問答考」（真淵著。写本一冊。西田秋実転写本）の奥書に、

文化十一年甲戌年九月三日以長瀬真幸本写之早 中島春臣

又、「本居問答」（真幸問・宣長答。写本三冊。寛政年間成立。広足自筆本）の奥書に、

文化十一年甲戌年九月以岩崎元澄本写之早 源春臣

とある。弥富氏「御小姓役時代の中島広足」（『国学者研究』所収）によれば、広足が家督相続して始めて公務で江戸に上ったのは文化四年三月で、同十二年に病氣につき隠居するまでの間に四度、藩主の上府に随伴しており、江戸滞在の間に同藩の本間素当らに誘われて江戸派歌人一柳千古の門に入った。（金註）これらのことから、それまで二条家歌学に泥んでいた広足が、江戸での千古への入門をきっかけに真淵一派の歌学に接することになり、△はじめて其論のたけたると▽を知るに至ったと言えよう。

「宇奈為乃須左備」は本文の前に、

此書ハアル學者ノ説ヲ辨ヘタルナリ

と記しているように、△或人▽が近体家の教えを推し古体家の教えを排しているのを、広足がいちいち論難するという形式でなっている。成立の時期についてははっきり判らないが、本文の筆跡が後年

の広足のそれとは違い、かなり若い時のものと思われ、しかも、この書での広足の論が、例えば、

すべて近縁家は古書の学問なき故に後世の妄説にまどへり。妄説にまどふが故に歌の善悪を知らず。善悪を知らざる故にわろくとくのはぬ歌をもよき歌とおもひをる。あはれむべし。

と言うように、徹底して国学者流の立場からの二条家歌学の排斥であるところから、初め二条家歌学から出発した広足の、二条家歌学からの脱皮を志した著述であるといえよう。

ちょうどこの頃、広足は又、景樹の「新学考」に書入れをしている（国会図書館所蔵。写本一冊）。その奥書には、

文化十四年五月十二日書をへぬ

とある。書入れの内容は、「字奈為乃須左備」と同様に、堂上派の流れを汲む景樹に対して批判的であり、例えば、

「ヲアラハセリ。スベテ古事記・書紀、其余祝詞・宣命・万葉等、賀茂翁・本居翁ノ注釈アリテコンタヤスクヨミウルコト、ハナリツレ。カクカクノシク云ベキモノニアラス。ソハ古学シテ後ニシララベシ。難者ノ此論ハタゞ翁ノ説ヲシヒテ破ラントテ、カニカクノノシリサワギタルマデニテ、翁イヘルコトビモシヒゴトノミ多、自ラ立タル説前後相違セリ。カバカリニテ翁ノ説ナドハヤプリロベキニアラス。サテ、難者今ノ意今ノ詞モテヨムベシト云ナガラ、猶自ラノウタハイニシヘニナラヒテヨメル也。又難者ノ説ノ如クナラバ、題詠ナドハ偏リテ意ヲマウクルモノナレバ、決テヨムベカラズト云ベシ。今ノ世、題詠ノマナヒラモセズ、古書ヲモミズシテイカデウタヨム人ノ有ベキ。

と、その立場は国学者のそれである。

しかしながら、後、「桂園一枝」への論難書である『大幣』（中川自休著。天保五年刊）・『大幣辨』（舟羽氏晴著。天保八年序）の広足の書

入れ（『桂園遺稿』下巻所収）が、桂園派・反桂園派といった立場から超越した態度でなされていること、『桂園入門簿』（『国学者伝記集成』『香川景樹』所収）天保七年の条にその名前が見出されること、又、ずっと後年になるが、嘉永七年閏七月十六日付けの西田秋実宛広足書簡に、中院通茂著「溪雲問答」について、

最早所蔵之書大かた御覽相濟候と可存候。溪雲とは近縁家ものなれど、是も一わたり見置候方宜候間、入御申候。

と言うことなどからも、広足が狭量な分派主義者でないことは窺いうるであろう。景樹の歌に対する広足の評価は、『檀園隨筆』巻上の次の言がよくあらわしている。

たけたかき歌の味ひはしる人すくなし。景樹死しては、此味ひをしる人たれならむしらずかし。景樹が歌に高調なるいと多かれど、おほかたの人はそれにはもつかで、たゞめづらしくいひなしたる彼人のわろきくせある歌をのみめではやすめり。まことに耳あきたる人はすくなくもなりけり。

いかにたかき歌の味ひはしる人すくなし。景樹死しては、此味ひをしる人たれならむしらずかし。景樹が歌に高調なるいと多かれど、おほかたの人はそれにはもつかで、たゞめづらしくいひなしたる彼人のわろきくせある歌をのみめではやすめり。まことに耳あきたる人はすくなくもなりけり。

此歌まことに高調、其けしき眼前にかびてたやすくよみがたき也。是をおほかたの人はいづこがよきとて心もとめぬは、まことに其余情ふかきをえしらぬなりけり。

従来、井上通泰氏（『南天莊備記』）や黒岩一郎氏（『香川景樹の研究』）などはこの一節を以って、広足が景樹の歌に傾倒したかの如き説を立てておられる。しかし、いかにたかき歌の味ひはしる人すくなくもなりけり。まことに耳あきたる人はすくなくもなりけり。まことに其余情ふかきをえしらぬなりけり。『桂園遺稿』下巻所収）において、

五十年前のうたなり。万葉風をしきりによみたる時の歌なり。

と云い、桂園派の松波資之がその後には次いで、

過しころ木村半六行納がいはく。景樹宗匠へ一番よき御歌をと願ひし

四

「詠草」を全体的にみれば、

に、五六十日も過ぎて俄おろす云々のうたをもらひたり。されば此うたが景樹もよきとおもはれたりと見えたり。此事をいうて中島広足へも見せしに、広足も此れが一番よきといへりときつて、實と思ふに、左にあらす。行納等は此の道をしらす。ひたすら古へを好むゆゑ其好意にしたがひてあたへられたるなり。広足も行納も歌を知らぬからのもどひなり。

此比はこゝろうき事のみ多きにつもり行み
大かたもうきよの中にうき事のさらにかさなる身をはいかにしてまし
うれしがることはなくもなけかしをいかにつもれる身のうさそこは
いにしへもみしかきもの、はしきるといひしや今の我身なるらん
(以上十九丁ウラ)

此ころうき事のみおもひつゝけつて

うき事をおもひあつめてなとかわれ人やりならぬなけきするかな
うき事をこゝろにおもひあつむればおき所なく身となりぬめる
冬のよのいと長きにもつきせぬはうき身をなけくおもひ也けり
ぬは玉のよるは心のくたけつゝひるはおもひにむすほ、れけり
山風のいたま吹いりさむきよをおきあかしつゝ身をなけく哉

あかつきの氷れる袖にねやのとのしものふかきもかつしられけり
(以上、二十一丁オモテ、同ウラ)

ことし大江戸におもひ立つるをやまひにかへりて道よりかへり
ぬ。かくて三月廿五日長瀬氏の旅たちをおくる。

東にてまぢえんとこそおもひしかなほこゝなからわかるへきかな
はるゝにおもひた、れし東路を君に行へになして立つ、
(以上二十九丁ウラ)

一派の善しとする歌風、いわば桂園調に対してはあまり泥まなかつたのである。広足の歌人としての立場は、

すべて歌のよみかたの論は、賀茂大人の詞、春海が歌語、千藤翁の詠歌論等につきためり。(草稿本「櫻園隨筆」巻一「中島広足全集」第一篇所収)

と云うように、あくまでも江戸派歌人のそれである。桂園入門に關しても、兼清正徳氏の言われるように、国学的立場から全く新しく桂園派への転向を不すものではなく、あらゆる歌論を包括的に撰取するための一手段であつたと言ふべきであらう(「香川景樹」)。更に言へば、山本嘉將氏が強く主張されるように、幕末歌壇においては、各派の間の排他的雰囲気は薄らいでくるのであり(「近世和歌史論」)、一系統に収めるのが困難になつてくる。広足の場合もそのよい例と言つてよいであらう。

などのように技巧を用いず、単純素直な情意を詠出したものもあるが、そういった歌は限られていて、多くは技巧を駆使した趣致的な歌で占められている。例えば、

(イ) 山里にひとりなめてひくことは松の風こそめてはやしけれ

(一丁ウラ)

六月十八日のよよひに夕立して夏行空の月いとすし

(ロ) よひのまのあつさむする、夕立は月のあけをもあらひつる哉

十九日のよ軒はの竹に月のほのめくを見て

(ハ) 風わたる竹の末ははてる月の鏡の塵を払ふと見る

有明月

(三) 山のはを踏はるかにて見る月はあくる空こそうらみられけ

廿六日のあした雪ふれり

(ホ) 梅の花散しく庭にふる雪はにほひをさへにうはふとを見る

すゝ虫を

(ハ) 秋をへてふりぬるやとにふりせぬはたすゝ虫の声にさりけ

などはいずれも一首の構成の上からは最も簡單明瞭なものではあるが、修辭の面から見れば、極めて技巧的である。

(イ) は、王維の詩「竹里館」△独坐幽篁裏／彈琴復長嘯／深

林人不知／明月來相照▽と、『源氏物語』「手習卷」の、月夜

に尼たちが合奏する伴の一文△(琴の音を)松風もいとよくもては

やす▽とからの本説取りであり、上三句を漢詩の世界、下二句を

『源氏物語』の世界とそれぞれ対置させている。

(ロ) は、夕立が月の顔を洗って、涼しさとともにその明るさを

も一層増させた、と機智的に詠んでいる。

(ハ) は、十九夜の月が竹の葉末越しに見えており、竹の葉末が

風に吹かれて月の上を動いているのを竹の葉の箒で、月の鏡の上

の塵を払っている、と見立てた歌である。

(三) の表面の意味は、西の山の端を更に遠くで見ている月は、

明けてゆく空の裏側を見ることができ、という遊戯的な歌である

が、△うらみ▽に「恨み」を掛けて恋を詠み込んでいる。即ち、

後朝の別れであり、△月▽に自分を托し、明けてゆく空を恨みが

ましく思う恋心を詠んでいる。

(ホ) は、『詞花集』春歌△桜花ちりしく庭を払はねばきえせぬ

雪となりけるかな▽の本歌取りである。本歌は散った花を雪に

見立てているが、広足の歌は雪そのものを詠っており、梅の花の

色と香とを感覚的に詠んでいる。

(ハ) は、『源氏物語』「鈴虫巻」△心もて草のやどりぞいとへ

どもなほすゝ虫の声ぞふりせぬ▽の本歌取りである。△ふり▽と

いう語を重ねて語調をよくし、しかもそれが△すゝ▽の縁語とな

っている。

以下に、一首の構造も修辭技巧も複雑なものを挙げる。

琴

よ竹もてつくれる琴におのつから五のふしやひきわかれけん

(三丁ウラ)

△五▽と△ふし▽とが△よ▽の縁語。△ひき▽が「弾き」と「引

き」との掛詞。

滝のもとに牛牽たるうら人あり

世の中のにこりをうしとおもへはち岩瀬のなみの引てかへりし

(十一丁オモテ)

△うし▽に「牛」と「憂し」とを掛け、△引てかへりし▽に牛を引

っばって帰ることと波が引いて返ることを掛けている。△にこ

り▽と△瀬▽とが縁語。

塵をよめる

かりかねの声こそはやく聞ゆめれいなおほせとりもなかね門田に

(十四丁オモテ)

かりかねの声こそはやく聞ゆめれいなおほせとりもなかね門田に

(十四丁オモテ)

△かり▽と△いな▽とが縁語。△門田に▽は「かとだに（言いながら）」を掛けている。「古今集」秋歌△我門に稻おほせとりの鳴くなべにけさ吹く風に雁はきにけり▽の本歌取りであり、稻負鳥が鳴いているところへ雁が渡ってくるという本歌の逆の発想である。

寄糸恋

わかおもふ入をはつねにみつあひのいとなかきよにたゆるふしなく

(十五丁オモテ)

『万葉集』卷四△独り寝て絶えにし紐をゆゆしみとせむすべ知らにねのみしぞ泣く／わがもたる三相によれる糸もちて付けてまじもの今ぞ悔しき▽の本歌取り。△いと▽が「糸」と副詞「いと」との掛詞。△よ▽と△ふし▽とが縁語。

九月廿二日のあした

置露もしくれも色はなきものをいかて木のはの深くそむらむ

(十六丁ウラ)

露や時雨が木々の葉を染めて紅葉させるといふ発想の歌は古歌に多いが、これはその類型を念頭においてその理由を問いかけている。

九月辰

風の音におとろきそめし秋なれとよなくくをけふとしるよしそなき

(十七丁ウラ)

『古今集』秋歌△秋立つ日よめる／秋きぬとめにはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる▽の本歌取りで、上三句に本歌の意味を受ける。

忍忘恋

大かたの人めつゝみを隔来てつひにあせぬる中川の水(十八丁ウラ)

△つゝみ▽が「慎み」と「堤」との掛詞。△あせ▽が「浅せ」と「褪せ」との掛詞。△つゝみ▽△あせ▽△中川の水▽が縁語。

女郎花をよめる

あやなくもころそうつるをみへしたゝ一時の花とみながら

(十九丁オモテ)

『古今集』雑歌△秋の野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花も一時▽の本歌取りで、いずれもおみなえしを美女に見立てている。

懸簾看雪

そはたつる枕なからに玉すたれかゝけすて見る筆のゆきかな

そはたつるまくらなからに見つる歌をすもさはらぬみねの白雪

(以上、十九丁ウラ)

いずれも、白居易の詩「香炉峰下新卜山居。草堂初成。偶題二東壁。」△日高睡足猶慵起／小閣重衾卜不_レ怕寒_レ遺愛寺鐘歇_レ枕聽_レ香炉峰雪撥_レ簾看_レ▽の本説取り。

扇中席

たひころも草のむしろになれてしもなほしきしのお故郷の空

(二十丁ウラ)

△ころも▽と△なれ▽、△しき▽と△むしろ▽がそれぞれ縁語。

雀

このうちにさもかひなれしすゝめのことひてゐぬきかあやまちそうき

(三十三丁ウラ)

『源氏物語』「若紫巻」△雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠の中に籠めたりつるものを▽の本説取りである。

鵜

のかれえぬよのうきめこそかなしけれあみにかゝれる魚ならねとも

(三十三丁ウラ)

△うきめ▽が「浮海布」と「憂き目」との掛詞。△め▽と△あみ▽が縁語。見立ての歌である。

みをつくし

(ト) には江のふかき心ならはゝやみをつくしともよに見るまで

(チ) ふかきえのこゝろをあへてよの中の身をつくしともなるよしも
かな

(リ) なにはえのこゝろふかくはよの人の身をつくしともならぬへき
歌 (以上、三十三丁ウラ)

△みをつくし△は「澤標」と「身を尽し」との掛詞。(ト)は△な
には△なら△つくし△が縁語。△ふかき△が△江△と△みをつ
くし△の縁語である。(チ)は△え△が「江」と「縁」との掛詞。
(リ)は△え△△ふかく△が縁語。

二もの杉ならまさはふる川のおなしなかれにまたもすま、し
(三十五丁ウラ)

『古今集』雑歌△はつせ川ふる川のべにふたもとある杉としを経て
またもあひみむ二本ある杉△、「源氏物語」「玉鬘巻」△二もの
杉のたちどをたづねずばふる川のべに君を見ましや△の本歌取り。
△川△△ながれ△△すま△が縁語。

一柳大人へ
もしほ草かくて月日をすくしつゝ我世つくしのあまとなららん
(四十二丁オモテ)

△かくて△が副詞「かくて」と「書く」との掛詞。△つくし△が
「筑紫」と「尽し」との掛詞。△もしほ草△△あま△が縁語。

以上の歌は「詠草」の中でも修辞技巧を凝らしたものであり、気
分のな詠み口で、その風詠は新古今風の調の歌である。それは「詠
草」全体に言えることであり、

まっ人
ますらをのさつ矢の幸となりけり木ぬれもとむる櫓のむさゝひ
まっ人
ますらをのさつ矢の幸となりけり木ぬれもとむる櫓のむさゝひ
ますらをのさつ矢の幸となりけり木ぬれもとむる櫓のむさゝひ
ますらをのさつ矢の幸となりけり木ぬれもとむる櫓のむさゝひ
(三十三丁オモテ)

の如く詞の上で△さつ人△さつ矢△木ぬれもとむる△△むさゝ
ひ△と万葉語で構成されている歌も、句格の上では三句切れ、体言
止めで新古今調の詠い口である。

五

前述した如く、広足は江戸派の流れを汲む国学者歌人である。江
戸派歌人は、春海の「歌語」に見られるように、新古今風を強く非
難するのであるが、彼らの実作はむしろ新古今風の強いものである
(窪田空穂氏、日本名著全集「和文和歌集」解説)。広足も、△かの新古今
を歌の盛也といはれたる論のあしき事△(草稿本「権園隨筆」卷二)を言
いながら、実作においては、辻森秀英氏が指摘されたように、「権
園歌集」には新古今風の歌が極めて多く、「近世末の新古今風について」
「国文学研究」第五十一巻、「詠草」の歌も、以上見てきたように新古
今調の風詠が多い。二者には十五年余りの隔りがあるのであるが、
歌の傾向には目立った変化というものが感じられない。このこと
は、広足の資質に拠るものもあるが、もっと一般的に、詠歌を学
問修養のための手段と見なす国学者の歌であるということの方が
より大きいであろう。広足の歌論は穩健で、当代の景樹や言道のよ
うに、和歌の革新を叫んだわけではなく、景樹や言道が現れたこの
時代においては、歌学者としてむしろ保守的な立場にあったと言
べきであろう。そして今日、近世末の和歌を言う場合、桂園派歌人
のように一世を風靡した集団、言道のように抜んでた存在のみを問
題にする傾向があるが、彼らが時代の新しさを代表するものだとす
れば、むしろ、広足に見出されるような江戸派末流の保守的な存在
の方が、時代の平均的歌人像であったと言えるのではなからうか。

注

- 1 「權園長歌集」では歌題が△詠豊後國白黒浜之小石歌▽となる。
- 2 「蓬萊石記」は、「權園文集」では題が△高岡某がもたる奇石にかきそへける詞▽と替る。
- 3 弥富破摩雄氏著「和田殿足家と其の歌集」参照。
- 4 書信で△辻のかなの考いかゞ侍らん。よく見給ひてひが事侍らば、しめし給へ▽と質疑しているが、草稿本「權園隨筆」巻二によれば、△辻の仮字は、ツヂと書べし。ツドヒミチの略にて、ツヂのヂは路の義なるべし▽と春平は答えている。因に、草稿本「權園隨筆」は全集校訂者（横山重氏・弥富破摩雄氏）によれば、広足三十歳（文政四年）前後である。
- 5 その他に長瀬真幸・本間業当等の名前が出てくる。
- 6 広足は文化十二年に病氣に付き隱居、十四年長男功男病死、文政元年祖母卒、三年には自ら大患、一男鉦太郎も重病を煩う。
- 7 続きが表紙見返しにかけても同筆で認められているが、直接自身の歌学には触れていないのでここでは省略する。
- 8 弥富氏は入門を文化九、十年の頃とされる。

後記

引用は原文のままであるが、和歌以外は私に句読点・濁点を付した。

最後に、度々の資料調査に快く協力して下さい下さった長崎県立図書館と、昭和四十八年に広足との出会いを作って下さって以来絶えず励まして御教示を与えて下さった今井源衛・中野三敏両先生に深甚の謝意を表します。